

## 優秀講演賞 「受賞者の言葉」

土木史研究発表会では、平成23年度（第31回）より、若手研究者・若手実務者を表彰し、研究及び実務への意欲向上に寄与するとともに、継続的に土木史研究を行う基礎とすることを目的として、土木学会会員で発表会開催年度末まで40歳以下である発表者本人を対象に、土木史研究発表会において優れた口頭発表を行ったものに対して優秀講演賞を授与してきました。

昨年（第34号）より、「受賞者の言葉」として、受賞者の喜びの声や土木史研究に対する思いなどを、順次掲載しています。

### 平成 23 年度（第 31 回：早稲田大学）

林 倫子：伏見町による宇治川派流公有水面埋立工事計画の変遷

西山孝樹：我が国の古代の僧が持ち合わせていた仏教思想と彼等による土木事業について

真田純子：土木遺産を活用した土木教育の実践

### 平成 24 年度（第 32 回：日本大学）

出村嘉史：近代岐阜の都市計画黎明期における土地区画整理の意義

林 倫子：宇治川派流公有水面埋立工事からみた伏見の都市経営策

### 平成 25 年度（第 33 回：東北大学）

岩本一将：1910 年代岐阜市における市区改正事業の主体とその狙い

八尾修司：戦前期大阪における公園道路の計画思想

阿部貴弘：城下町小幡の雄川堰の形成と変遷に関する研究

### 平成 26 年度（第 34 回：日本大学）

大沢昌玄：関東大震災における横浜の復興土地区画整理事業に関する研究

出村嘉史：大学の初年次教育としての土木史講義

真田純子：棚田・段畑の利用および基盤の変容に関する考察

中尾聡史：我が国の自然観が土木に与えた影響の歴史的変遷に関する基礎的研究

### 徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部 真田純子

優秀講演賞は平成 23 年度の「土木遺産を活用した土木教育の実践」と平成 26 年度の「棚田・段畑の利用および基盤の変容に関する考察」でいただきました。「土木遺産を活用したドボク教育の実践」は、授業でやっている「土木学会誌のみどころ土木遺産みたいな記事を書く」という演習を紹介したものです。「建設創造設計演習」という少人数の授業で私が担当しているこの演習は、調査の方法や文章の練習、地図作成を含めた紙面のレイアウト等、総合的な演習になっています。発表ではこの授業についてその概要と 1 年目の課題、2 年目の改善、今後の課題等について説明しました。従来の「土木史研究」からは大きくずれますが、近年、土木史の実践や教育も発表してよいという雰囲気が出てきたため発表しました。しかも講演集に載っている論文はわずか 2 ページです。優秀講演賞をいただいたときに当時の委員長だった小林先生が「2 ページで投稿するという勇気がすごい」とおっしゃったのが印象に残っています。

平成 26 年度の「棚田・段畑の利用および基盤の変容に関する考察」は、文化的景観の企画セッションに声をかけていただいて発表したもので、棚田や段畑の石積みが変容していること、その変容を生み出している生業との関係について論じたものです。生業が形になってあらわれていることが価値のはずの「文化的景観」が、制度としてはその「形」を取り出し固定化しようとしていることに以前から違和感があり、それを思う存分述べさせていただいたという発表でした。

どちらもいわゆる従来の土木史の研究とは毛色が違いますが、熱い思いをもって発表したら優秀講演賞をいただけたという状況です。近年、多様な発表が増えてきています。こんなことでも発表して良いのか、という端緒を開く先進部隊として、これからもわくわくできるような情報提供をしていきたいと思えます。もちろん、しっかりした土木史研究もしつつ、ですが。

私が初めて全国規模の学会発表を行ったのがこの土木史研究発表会でして、「1910年代岐阜における市区改正事業の主体とその狙い」という都市形成史の研究発表を行わせて頂きました。研究発表の場にはまだまだ慣れておらず、足を震わせながら必死に発表していた事を今でも鮮明に覚えております。そのような中で、優秀講演賞をいただくことができ、大変光栄に感じております。

私の発表した研究内容は、明治末から大正初期における岐阜の都市建設を取り上げたものです。道路拡幅や電気軌道など、社会基盤整備が急速に進む中で、事業に関わった様々な立場の組織がどのような狙いを持って事業を進めたのかを明らかにしました。

土木史研究発表会で受賞したことは、すなわち自らの研究成果が当該分野に認められた証であると捉えております。この賞を受賞したことで、史料収集における視点や研究の仮説立て、後輩への研究指導などにおいて自信を持って取り組むことが出来るようになりました。また、この自信は研究のみではなく、例えば設計競技（コンペ）やまちづくりのワークショップ等においても同様で、土木史を研究する者として、当該分野の視点で意見を述べるのが、私の持つ武器であると考えようになりました。

最後に、このような素晴らしい分野へ導いてくださった岐阜大学出村嘉史准教授をはじめ、学会発表および懇親会などで意見を下さった先生方に感謝を申し上げ、受賞者の言葉とさせていただきます。